

1 つぎの文章を読んで問題に答えましょう。

夏の夜、町じゅうがざわめきに包まれていました。年に一度の夏祭りの日です。昼間の暑さがようやくやわらぎ、空にはかすかに夕やけの赤みが残っていました。通りには屋台がずらりとならび、色とりどりのちょうちんが風に揺れています。人々の声や笑い声、太鼓の音や売り子の呼び声が重なり合い、町全体が一つの大きな舞台のように感じられました。わたしは家族と一緒に祭りに出かけました。母は「浴衣が似合うね」と笑顔でほめ、父は財布をにぎりながら「今日は特別だ」と言いました。弟はわたあめの屋台を見つけてはしやぎ、わたしも胸が高鳴りました。通りを歩けば、金魚すくい、りんごあめ、やきそば、かき氷——目に入るものすべてが光を放っているように見えました。やきとりの香ばしいにおいが風にのり、食欲をさそうと同時に、祭りの夜のわくわく感をさらに高めました。

広場に入ると、中央にやぐらが立ち、太鼓の音が響きわたっていました。人々が輪になって盆おどりをしています。小さな子どもからお年寄りまで、だれもが笑顔で音に身をまかせていました。わたしも見よう見まねで輪に入りました。最初はぎこちなかったけれど、不思議と太鼓のリズムに合わせて体が自然に動き出しました。知らない人とも目が合い、にっこりと笑い合うと、心の距離が一気に近づいたように感じました。祭りには、町の人を一つにする力があるのだと実感しました。

やがて夜空に第一発の花火が上がりました。ドーンという大きな音とともに、光の花がぱっと咲きました。赤や青、金色の花火がつぎつぎと広がり、夜空を鮮やかに彩ります。光は川面や人々の顔にも映り込み、あたりを幻想的な世界に変えていきました。わたしは思わず息をのんで見上げました。周りの声や音がずっと遠のき、ただ花火と夜空だけが心

を占めていきました。

そのとき、となりに立つ父と母の姿が目に入りました。花火の光に照らされた父の顔はいつもよりやわらかく、母の横顔は夢見るように静かでした。弟も目を輝かせて花火を追っています。ふだんはそれぞれ忙しく、家族そろって過ごす時間は少なくなっていたけれど、この瞬間だけは同じ景色を見つめていました。胸の奥にあたたかいものが広がり、

「この時間を大切にしたい」と強く思いました。

花火は次第に大きさと数を増し、やがて夜空を真昼のように照らす大連続花火へと移りました。ひとつが消える前に次の光が広がり、まばたきするのさえ惜しくなるほどでした。最後に打ち上げられた花火は、大きな音とともに夜空いっぱいに広がり、金色の光の雨のように降りそそぎました。観客の間から大きな歓声と拍手がわき起こり、わたしも夢中で手をたたきました。胸に残ったのは

「この景色を忘れたくない」という強い思いでした。

あの祭りの夜に見た景色——花火の光、踊る人々の笑顔、そして家族と分かち合った時間。それは一瞬の出来事だったかもしれませんが、でも、その一瞬がわたしの心に深く刻まれ、消えない光となりました。にぎやかな祭りの夜の中にあつた確かなつながりと喜び。それこそが、わたしにとって一番大切な思い出になったのです。



- (1) 祭りの夜、通りに並んでいたものとして本文に書かれているものを二つ書き抜きなさい。

①
⌒

②
⌒

- (2) 盆おどりの場面で、筆者はどのように感じたとありますか。本文の内容に合うものを一つ選びなさい。

- ① 最初から上手に踊れて得意になった。
- ② 音に合わせて自然に体が動き、人とのつながりを感じた。
- ③ うまく踊れず恥ずかしくなり、すぐに抜け出した。
- ④ 知らない人が多くて不安になった。

答え ()

- (3) 花火が夜空に広がったとき、筆者の心の状態として本文に合うものを一つ選びなさい。

- ① 周囲のにぎやかさが消え、花火と夜空だけに心を奪われた。
- ② まわりの人の声が気になり、花火を楽しめなかった。
- ③ 花火の音がこわくて耳をふさいだ。
- ④ 花火を見ながら友だちとおしゃべりをしていた。

答え ()

- (4) 花火の光で照らされた家族を見たとき、筆者はどんな気持ちになりましたか。三十五字程度で説明しなさい。

- (5) 最後の花火について、本文の内容に合うものを一つ選びなさい。

- ① 夜空を青一色に染めた。
- ② 小さな光がゆっくり消えていった。
- ③ 夜空いっぱいになり、金色の雨のように降りそそいだ。
- ④ 音が小さく、人々に気づけなかった。

答え ()

- (6) 「この景色を忘れたくない」という筆者の思いには、どのような意味がこめられていますか。三十五字程度でまとめなさい。

- (1) 祭りの夜、通りに並んでいたものとして本文に書かれているものを二つ書き抜きなさい。

① 屋台

② 色とりどりのちょうちん

- (2) 盆おどりの場面で、筆者はどのように感じたと考えますか。本文の内容に合うものを一つ選びなさい。

- ① 最初から上手に踊れて得意になった。
- ② 音に合わせて自然に体が動き、人とのつながりを感じた。
- ③ うまく踊れず恥ずかしくなり、すぐに抜け出した。
- ④ 知らない人が多くて不安になった。

答え (②)

- (3) 花火が夜空に広がったとき、筆者の心の状態として本文に合うものを一つ選びなさい。

- ① 周囲のにぎやかさが消え、花火と夜空だけに心を奪われた。
- ② まわりの人の声が気になり、花火を楽しめなかった。
- ③ 花火の音がこわくて耳をふさいだ。
- ④ 花火を見ながら友だちとおしゃべりをしていた。

答え (①)

- (4) 花火の光で照らされた家族を見たとき、筆者はどんな気持ちになりましたか。三十五字程度で説明しなさい。

解答例
家族と同じ景色を共有できる喜びと、つながりの大切さを感じた。

- (5) 最後の花火について、本文の内容に合うものを一つ選びなさい。

- ① 夜空を青一色に染めた。
- ② 小さな光がゆっくり消えていった。
- ③ 夜空いっぱいになり、金色の雨のように降りそそいだ。
- ④ 音が小さく、人々に気づけなかった。

答え (③)

- (6) 「この景色を忘れたくない」という筆者の思いには、どのような意味がこめられていますか。三十五字程度でまとめなさい。

解答例
家族や町の人と分かち合った花火の思い出を大切にしたいという思い。